

活動報告書

報告者氏名：神田雄樹 所属：秋田きらり支援学校 記録日：2013年2月27日

【対象児の情報】

- ・ 学年
小学部3年生の男児
- ・ 障害名
ウェルドニッヒ・ホフマン病による四肢まひ
- ・ 障害と困難の内容



- ・ 脊髄性筋萎縮症のため、寝たきりの状態で、自力で手足を動かすことができない。
- ・ 初めての人と接すると、緊張のため心拍数が上昇する。
- ・ 眼球、右眉、右頬、右下唇、を自力で動かすことができ、それらの動きをコミュニケーションの手段として活用している。
- ・ まばたきにより、Yes・Noの意思表示をすることができる。
- ・ 自分の気持ちや感情を、カードや教師の言葉の中から選択して伝えることができる。
- ・ 学習に対する意欲が高く、初めて学ぶことや経験することに対してよく関心を示す。
- ・ 緊張すると心拍数が上がり、体調が優れなくなる。
- ・ 音楽が好きで、聴き慣れた曲に合わせて、まばたきでリズムを取ったり、教師と一緒に楽器を鳴らしたりして楽しむことができる。

【活動目的】

- ・ 当初のねらい
訪問教育を受ける児童は教師と1対1で学習するため、同年代の児童とコミュニケーションを図る場面の設定が難しいが、友達と関わりたいというニーズをもっている。しかしながら、健康上の理由から、スクーリングで学校に行くことは難しい状況にある。そこで、学校で学習している友達との学習に自宅にいながら参加したり、交流を深めたりするためのツールとしてiPadを活用することを目的とした。
- ・ 実施期間
iPadを活用してインターネットテレビ電話サービス（Skype）を5回実施した。実施日は、平成24年8月30日、9月6日、9月13日、9月20日、10月29日。
- ・ 実施者
宗田一成
- ・ 実施者と対象児の関係
訪問教育担当教員

【通信内容と対象児の変化】

・対象児の事前の状況

昨年度まで、インターネットテレビ電話サービス（Skype）を活用して訪問教育を受ける児童や学校の友達と交流を図ってきた。体調面の理由でなかなか学校に行くことが難しい訪問教育を受ける児童にとっては、家庭にしながら交流を深めることができ、十分な成果を得ることができた。しかし、自宅でSkypeを行うためにはパソコンやウェブカメラ、USBタイプのデータカードの準備だけでなく、電源の確保や画面を見やすい角度に調整するなどハード面の課題が多々上げられていた。

年度当初は、対象児の担任が替わったことによる緊張から心拍数が上昇していたため、信頼関係を築くことを中心に授業を進めた。また、7月中旬は体調不良のため入院し、体調面が安定しなかった。



昨年度まで使用していた機器



今年度使用した機器

・活動の具体的内容

アプリケーションはwi-fiネットワークを経由したビデオ通話ができる「Face Time」を使用し、訪問先でもWi-Fiを活用できるようポケットWi-Fiを活用した。「Face Time」は、Wi-Fi環境が整っているところであれば、ログインをしなくても通話でき、タイムラグが若干あるものの、Skypeほど気になるものではなかった。そのため、「Face Time」を使用することにした。

対象児童はベッドで仰臥位の姿勢で学習しているため、ベッド上でも画面を注視しやすいように自由に角度を調整できるフレキシブルアームでiPadを固定した。フレキシブルアームを使用することで、教師の手が空き、児童の支援をしたり、別の教材を提示したりすることができるようになるだけでなく、児童の細かい反応に気付くことができるようになるのではないかと考えた。

友達と関わりたいというニーズをもっているが、新しいことや関わりの少ない友達、教師に対して緊張してしまうことが多い。そのため、昨年度から交流を行ってきた児童と小集団で交流学級の児童と「Face Time」で交流を行うこととした。安心して活動に参加できるようになってから少しずつ大きな集団へと移行し、学部行事の音楽コンサートの様子を中継したり、音楽の授業を中継し、一緒に楽器演奏をしたりした。

・対象児の事後の変化

i P a dを活用し始めた頃は、入退院を繰り返して体調面が安定しなかったことや、久しぶりのビデオ通信だったこともあり、極度の緊張から心拍数が上がっていたが、何度か繰り返すことで落ち着いて交流ができるようになってきた。また、フレキシブルアームを使用することで画面に注目しやすくなり、友達の話聞いて大きく目を見開いて気持ちを表現する場面が見られた。



【報告者の気づきとエビデンス】

・主観的気づき

- ①「Face Time」を活用した交流の経験を重ねていくことで、友達との関わりをもちたいとはっきりした気持ちを表情で伝え、「Face Time」を通じて友達とのつながりや所属感を感じることができた。(図1)
- ②訪問教育では学部コンサートなどの行事の際にこれまではビデオ撮影をして、後日訪問指導した際に見ていたが、演奏が終わるとまばたきで気持ちを表現し、ほどよい緊張感を保ちながら行事に参加することができ、ビデオで撮影したものを視聴する間接的な参加との違いを実感できた。(図2)
- ③音楽の授業を中継し、一緒に歌を歌ったり、楽器を演奏したりした。普段は教師と1対1での授業が中心であるが、演奏の後に大きな拍手やたくさんの感想をもらって、普段の授業では得られない満足感や喜びをまばたきで表現し、離れた場所にいる友達と一体感を味わいながら授業に参加することができた。

◇年間を通して、タブレット型端末を活用してきたことで、もっと友達と関わりたいという気持ちが高まってきている。体調が安定せず入退院を何度か繰り返したため、定期的に「Face Time」による交流を実施することが難しかった。しかし、小集団から段階を踏んで交流集団を大きくしていくことで、落ち着いて活動に臨むことができ、友達との関わりを十分に味わうことができた。



図1：学年との交流



図2：学部コンサート



図3：音楽

・エビデンス（具体的数値など）

表1に「Face Time」を使用して交流を行っているときの心拍数の数値を示す。1回目は、昨年度から交流を行ってきた児童と夏休みの出来事や学習している内容についてやりとりをした。久しぶりの交流だったことや退院して間もなかったこともあり、心拍数が高かった。2回目以降は少しずつ心拍数が下がってきているため、継続的に取り組むことで落ち着いて活動できることが分かった。3回目で心拍数が上がったのは、担当教師が欠席し、他の教師と一緒に授業したことが原因と考えられる。

表1 Face Timeによる交流時の心拍数

日付	心拍数（最大）	交流相手、内容
8 / 30	142	小学部2年男子1名
9 / 6	120	小学部3年男子2名
9 / 13	137	小学部3年女子1名
9 / 20	125	小学部音楽コンサート
10 / 29	121	音楽（教科・領域を中心とするグループ）

※ 普段の心拍数は110～120程度で、若干の上下がある。130以上になると緊張のため発汗が多くなり、体調不良が心配される数値。

・その他エピソード

長期休業中にiPadを使いたいと保護者に表情や視線で表現することがあり、「空想どうぶつえん」や「動物しょうぎ」、「photo theater～海中散歩～」等のアプリケーションを余暇で活用した。特に、「けいたいえほんライブラリー」を多く利用していた。文字と音声で物語が読み進められていくため、「こえほん」よりも興味をもって見ていた。



余暇での様子